

「目には青葉 山ほととぎす 初鰹」に見る初夏の風情と「粹」

1 「目には青葉 山ほととぎす 初鰹」

「目には青葉 山ほととぎす 初鰹」

これは江戸時代中期の俳人山口素堂の有名な俳句です。春から夏にかけ、江戸の人々が最も好んだものを俳句に詠んで、江戸の町で一躍有名になった俳句です。

「目に映える青葉」は、桜が散った後芽が吹く若葉、ちょうどお茶もこの時期に新茶の時期になります。これから夏に向けて生命の力を感じさせます。今までの花、要するにピンク色の世界から若い緑や濃い緑な様々な種類の緑と青い空、すべてが江戸の町の活気につながりました。

そして、「ホトトギス」。非常に美しい鳴き声の鳥ですね。全体に灰色で、胸から腹にかけて横斑があります。「キョキョキョ」と鋭い鳴き声だそうです。ホトトギスはこの時期の鳥として、かなり古くから和歌や俳句に読まれています。例えば万葉集には「五月山卯の花月夜霍公鳥聞けども飽かずまた鳴かぬかも」という歌が入っています。「読み人知らず」となっていますが、そういう歌こそ、万葉集の詠まれた奈良時代、万葉の昔の趣向や人々の気持ちなどがわかるというものです。「五月の山。卯の花。月の夜。霍公鳥(ほととぎす)の鳴く声を聞いても飽きません。また鳴いてくれないでしょうか。」という意味で、夏の季節の雑歌とされています。この歌が残っているということは、五月、初夏の時にホトトギス・卯の花・月というものが、非常に人々にとって素晴らしく良いものであったということではないでしょうか。「花鳥風月」と美しい自然の風景や、それを重んじる風流を意味する四字熟語がありますが、まさに「ホトトギス」「卯の花」「月」とその風流の要素が3種類も入っている和歌になります。

ホトトギスは、このように万葉集の時代から江戸時代まで、いや、もちろん現代もですが、非常に風流で、この初夏の季節を代表する鳥として愛されてきました。『万葉集』では 153 例、『古今和歌集』では 42 例、『新古今和歌集』では 46 例が詠まれています。万葉集や古今和歌集では、鳴き声が聞こえ始めるのとほぼ同時期に花を咲かせる橘や卯の花と取り合わせて詠まれることが多いのも特徴です。まさに「花と鳥」を併せ持った風流の鳥ということになるのではないのでしょうか。

またホトトギスは夜に鳴くことでも知られています。特に、その年に初めて聞くホトトギスの鳴き声を忍音(しのびね)といい、非常に珍重したといいます。ふつうの鳥は外敵に襲

われないうために、夜に音を出すことはしません。特に、視力が弱いつうの鳥は、夜に狩りもしません。それだけに夜に鳴き声を出すホトトギスの鳴き声は、当時の静かな夜に非常によく響いたのではないのでしょうか。この忍音を聞くために、夜を徹してしまうというような光景が清少納言の「枕草子」には書かれています。

この「忍音」という単語、夜に、姿を隠し声を忍ばせながら音を立ててしまう。ある意味で、平安時代には「艶っぽさ」を表す単語としても使われていたんですね。ですから「忍音」を聞くために夜を徹するというのは、清少納言ならば風流かもしれませが、そうではない男性がそのようなことを言っていれば、少し違う想像をしてしまったり、あるいは、そのようなことを聞かされてしまった女性が「あれはホトトギスの忍音でございましょう」と言ってごまかしてしまうような場面もあったようです。ホトトギスの忍音は「徒然草子」や「土佐日記」などにも書かれていますし、万葉集や古今和歌集などの和歌の中にも、花に見立てた女性と重ねた恋歌の中に「ホトトギス」が出てくるようなものも少なくありません。

2 庶民には嫌われたホトトギス

では、そのホトトギス、庶民の間でも好かれていたのでしょうか。実は庶民の間ではそんなに好かれていた鳥ではないようです。

同じ「枕草子」に書かれている田植歌の中には「ほととぎす、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、われは田植うれ」（ホトトギスよ、お前がなくから俺がここにきて田植えをしなければならぬのだ…ホトトギスが鳴かなければもう少し休んでいることができたのに）というような記述が残されています。

「賀茂へまゐる道に、田植うとて、女の、あたらしき折敷（をしき）のやうなるものを笠に着て、いと多く立ちて、歌をうたふ、折れ伏すやうに、また、何ごとするとも見えでうしろざまにゆく、いかなるにかあらむ、をかしと見ゆるほどに、郭公（ほととぎす）をいとなめうたふ、聞くにぞ心憂き。」（上賀茂神社へお参りする途中で女たちが新しいお盆のようなものを笠としてかぶって、たいへん多く立っていて、歌を歌っている。体を折れ伏したりするように見えて、ただ何をするということもなくて、後ろの方に行くのは、いったい何のためなのだろうか。おもしろいと見るうちに、郭公のことをひどく無礼に歌う声は不愉快だ。）と清少納言は枕草子の中で書いています。

清少納言のような貴族には、田植は無縁の存在。清少納言はたまたま上賀茂神社に参拝に行くときに、田植えの姿を見ることになります。普段見ない田植は、清少納言には非常に珍しいものに見えたのではないのでしょうか。そもそも女性が顔も隠さずに、田植えの作業を行っているという状態は、貴族階級の女性には信じられないことではなかったかと思います。

少々余談ですが、昔は稲の神様のことを「サ」といいました。そして、この田植えは主に女性が行っていたんです。稲の神様が今年も宿ってくれるように女性は「晴れ着」を着て田植えを行います。この日はハレ着（紺の単衣に赤い襷、白い手ぬぐい、新しい菅笠）を着用

したとされていますが、この晴れ着には、様々な種類や地方によって色合いが違ったりしたところもあるようです。そして、田植衣装のこうした華々しさは、田植が重要なハレの行事であったことを物語っているのです。そして「サ」をよびこむ「乙女」であることから「早乙女」といわれました。このホトトギスの時期に田植えをする女性ということで、「五月女」と、同じ読み方で違う漢字をあてる場合もありますね。なぜ女性かといえば、やはり「神様」に仕える「巫女」が行ったということになります。といっても、田植はかなりの重労働です。その地区、氏神様の治める一番初めの田植を「神事」として、それ以外は、普通に田植歌で、村人総出で行っていたのではないのでしょうか。

清少納言は、この田植そのものに非常に興味がありました。自分に知らない「神事」があったと思ったのではないのでしょうか。しかし、そこで詠われていた歌は、自分の好きな、そして貴族の世界では風流の代表格であるホトトギスをこき下ろすものであったのです。

清少納言は、ホトトギスに対し、「おれ」（＝きさま）だの、「かやつ」（＝きゃつ）だのと無礼な呼び方をしているところ。そして「ホトトギスが鳴く為に、つらい農作業をしなければならぬ」と、ホトトギスを悪く言っているところ。この二点を以てどうしても田植歌を面白くないと書いています。

ではなぜ「ホトトギス」は、平安の庶民の間であまり良く言われなかったのでしょうか。貴族が風流といっているから、対抗してそう思ったというようなことはありません。そこまですら庶民は貴族に対して対抗意識もなかったのです。平安時代はそれほど生活に窮していなかったためにか、またはそもそも住む世界が違いすぎて、まったくお互いが干渉しなかったということもあるのでしょうか。基本的に、貴族のことを干渉する庶民というのはあまりいなかったのではないかと思います。

実は、ホトトギス、この鳴き声を、庶民の間では「シデノタヲサ」と聞こえるといわれていました。よく聞けばそのように聞こえるのでしょうか。この「シデノタヲサ」を漢字で書くと「死出の田長」となります。これは、死出の山を越えて、「田長」（＝農夫の長）に「田植えをせよ」と告げに来る鳥と思われていたのです。

ホトトギスが、灰色の小さい鳥で、なおかつ、貴族の間では風流とされていた「忍音」、要するに、夜の鳴き声が、実は、庶民の間では全く別な解釈になっていたのです。灰色というのは、まさに死出の山を行き来するので、その向こう側の色とこちら側の生きているものの世界の色を混ぜた灰色になっている。そして、百鬼夜行の跋扈する夜の闇の世界で、死者の声をその時に生きている人に伝える役目を、ホトトギスが担っていると考えていたのです。

要するに、庶民にとっては、「ホトトギスの鳴き声がする」＝「つらい田植えをしなければならぬ」なのです。そこで、田植え歌の中で、ホトトギスをこきおろしていたのです。

庶民にとっては、ホトトギスの鳴き声は、つらい農作業を促すもの。

貴族にとっては、ホトトギスの鳴き声は、風情のあるもの。

この感覚の差が、ホトトギスの印象を貴族と農業との間で異なるものという印象になっ

たのです。

3 江戸の町では庶民に好かれたホトトギスと初鰹

では「目には青葉 山ほととぎす 初鰹」という俳句。これはなぜ「江戸の庶民の好きなもの」になっているのでしょうか。ホトトギスは庶民に嫌われていたのではないのでしょうか。

実際にホトトギスの迷信は、中国で作られたものが多く、漢文の中には、ホトトギスが死んだ人の魂を運ぶ鳥として書かれています。

古代の蜀国の帝王だった杜宇は、ある事情で故郷を離れたが、彷徨うちにその魂が変化してホトトギス(不如帰)になったというのです。そのため、ホトトギス(不如帰)は今も「不如帰(帰るにしかず)」と鳴いている、というような伝説があります。

また、昔、貧乏な兄弟がいました。兄は盲目でした。優しい弟は毎日山へ行って山芋を掘ってきては、美味しい部分を兄に食べさせ、自分はまずい部分をこっそりと隠れて食べていたのです。ところが兄は、弟がもっと美味しいものを食べていると思いこみ、寝ている弟を刺し殺してしまったのです。ところが弟の腹を割いてみると、出てきたのは山芋の硬くて不味い部分ばかりだったのです。兄は後悔し、ホトトギス(不如帰)になってしまったといいます。そして「弟恋し」と鳴くようになった、というような伝説です。

このような中国で漢文に書かれた伝説が多いために、ホトトギスは杜鵑、時鳥、子規、不如帰、杜宇、蜀魂、田鵑など、漢字表記や異名が多いのが特徴です。また、漢字を見てわかるように、いずれも「死」「魂」などを連想させる漢字が非常に多いですね。これは、このような悲しい伝説に基づくものが多かったからなのです。

当然に、平安時代、中国から様々な文化が流入していた時代ですから、そのような伝説をもとにしたホトトギスの印象が、「死出の田長」になっていたのかもしれませんが。それに比べて貴族の世界には、中国とは違う感覚が鳥や花にイメージされていたのかもしれませんが。

しかし、これが江戸時代になるとかなり変わってきます。

江戸の庶民たちは、「田植」をしません。それだけにホトトギスは「死出の田長」にはならず、平安の貴族と同様に「風流」の代表になってくるのです。このホトトギスに対する意識が庶民の生活の変化を表しているといえます。この俳句の素晴らしさは、田植えから切り離され、「粋」を大事にする江戸の庶民の心根を、江戸庶民の好きなものを重ねて表現することで見事に表したということではないのでしょうか。

では「江戸の粋」といえば、やはり「初鰹」です。

「目に青葉」、要するに目、視覚に訴える初夏の輝き、そして「山ほととぎす」まさに、ホトトギスの鳴き声という聴覚に訴えるものが続きます。人間の語感には「視覚」「聴覚」「触覚」「嗅覚」そして「味覚」です。触覚はなかなか歌では表現できませんが、「嗅覚」と「味覚」を表す江戸の粋、これは料理であり、そして「初鰹」なのです。

もともと、日本人の間には「初物を食べると寿命が75日のびる」というような言い伝え

があります。初物が来たら今でも仏前に供えて、それから家族そろっていただくという家は少なくないのではないのでしょうか。このほかにも「初物」というものには、「初物は東を向いて笑いながら食べると福を呼ぶ」「八十八夜に摘んだお茶（新茶）を飲むと無病息災で長生きできる」（新茶を贈る風習もあります）というようなことを言われることもあります。このように初物とは、実りの時期に初めて収穫された農作物や、シーズンを迎え初めて獲れた魚介類などのこと。初物には他の食べ物にはない生気がみなぎっており、食べれば新たな生命力を得られると考えられ、さまざまな言い伝えも残っています。

しかし、初物の多くは、「実りの秋」とされています。実は、この初夏の時期に初物が出るものは非常に少ないのです。そこで、新茶と初鰹、この時期のこの二つのものは非常に珍重されたのです。

庶民の感覚でいえば、ホトトギスが古い世界では死のイメージであった部分があるのに対して、新茶と初鰹は、寿命が伸びて幸福のイメージがある。もちろん死のイメージは消えてしまっていて風流だけが残っているかもしれませんが、一方で、初物をいただいて明るくするというような所が良かったのかもしれませんが。

4 鰹と江戸っ子

ではどうして「鰹」が「粋」だったのでしょうか。魚ならば他にもたくさんいたはずですが。

まず、鰹が季節の魚であって、季節によって入ったり値段が変わったということが上げられます。旬の走りは珍しさが先行して値段も高めで、もう少し待てば盛りになり、味や値段も安定するのですが、それを待つのは野暮というものだったのです。江戸っ子は初物に手を出すのが粋の証だったのです。

当時「初鰹」は、「まな板に 小判一枚 初鰹」と宝井其角の句に詠まれているほど非常に高価な食材でした。当然に、当時は電車もなく、自動車もない、冷蔵庫もない状態でしたから、鰹を海から江戸に運ぶことが非常に難しかったのです。「江戸前寿司」など江戸は海産物が非常に有名で「一心太助」などの痛快なお話もありますが、しかし、それは「江戸前」で食べることができる食材に限られます。逆に、江戸前でとれない魚は、当然に氷などで冷やしながら輸送しなければなりません。腐るのが早い魚や鰹のように血が回りやすい魚は、すぐに臭いが出てしまいますから、新鮮なうちに運ぶのは非常に手間もコストもかかるようになるのです。

鰹は、江戸湾では取れない魚でした。江戸で初鰹といえば、ほとんどが鎌倉の沖でとれたものです。松尾芭蕉は「鎌倉を生きて出でけむ初鰹」と詠んでいます。

そのために、句に詠まれるように非常に高価になってしまいます。しかし、その「高価な食材」を誰も食べていない間に「初物を食べる」ということが「粋」であったのです。ですから、「初鰹は女房子供を質に置いてでも食え」と言われるほど愛されたのです。

鰹は「勝魚」とも言われて、非常に縁起の良い魚とされました。実は「目に青葉」の句で

あっても原文は「初鰹」となっていないで「初松魚」となっているんですね。実は、縁起の良い魚であるために「鰹」とせず、縁起の良い「松魚」と表現して「カツオ」と読ませたのです。また、初鰹そのものを食べることが「初勝利」のような感覚になってしまったのです。

このように初物に目がなく、そして「宵越しの金」を持たず、気風が良い。ある意味で無鉄砲で前後を考えず、威勢がよく、そして人情もろい。こんなところが江戸っ子気質ではないでしょうか。

昔から江戸の名物は「武士」「鰹」「大名小路」「広小路」「茶店」「紫」「火消」「錦絵」「火事」「喧嘩」「中っ腹」「伊勢谷」「稲荷」「犬のくそ」といわれています。

「武士」はやたらにえばっていたそうで、天下の往来の七分を武士が使って、残り三分を農工商が歩いていたとか。江戸は將軍様の御膝元ですから、武士が多かったのです。

「鰹」は見てきたとおりに、江戸っ子の粋の証です。

「大名小路」「広小路」は武家屋敷があったり、あるいは、日本橋界隈に広い道があって様々な人が往来するという人のにぎやかさですね。

「茶店」というのは、一つにはお茶を出してくれる場所という意味もありますが、忌詞で「吉原」のような遊郭も「お茶屋」といいます。遊びというのも江戸の特徴です。

「紫」というのは、歌舞伎などで使う青みがかった紫のことを「江戸紫」といいます。同時に紫という単語で醤油などを表し、江戸のしょうゆ味の食べ物ということも一つの特徴です。

「火消」火事の多かったころの火消はカッコいい憧れのお仕事だったのでしょうか。

「錦絵」今まで白黒だった絵に色がついて錦絵が江戸時代流行したそうですよ。

「火事」は江戸の華といわれるほど火事が多かった。火消がかっこいい仕事であったということは、当然に火事も多かったということになります。

「喧嘩に中っ腹」中っ腹は辞書によると「気みじかで威勢がよいこと」だそうで江戸っ子の特徴ですね。

「伊勢谷 稲荷に犬のくそ」というのは、伊勢谷という名前のお店も、お稲荷様も、犬の〇〇〇も、非常に多かったということです。特に稲荷は、大店が自分の庭に商売繁盛の御稲荷様を祭ったことから、かなりさまざまなお稲荷様があったようです。

このようなところで江戸時代の粋、江戸っ子気質というのがわかるのではないのでしょうか。

ちなみに、江戸時代からの漁業の町「焼津」では、その鰹を焼津から、人力高速艇「押送船」で、海路日本橋の魚河岸にやってまいります。ある記録によりますと、6本が將軍家へ届けられ、3本は魚の大店である八百善が仕入れまして、残りは三代目歌右衛門が購入したそうです。この時の値段は鰹一本 2~3 両です。今の値段にすると 1 本 40 万円くらいの超高級魚であったことがわかります。そんな初鰹もこうやって高級でもすぐに売れてしまったのです。

それでも早く食べないと、腐ってしまうので、消毒の意味を含めて「タタキ」にしたり、あるいは、「ニンニク」や「生姜」と一緒に食べるようになっているのです。

江戸っ子は、初物も非常に好みました。その鰹の味を一年中楽しみたいということから始めます。焼津には、「なまり節」というものがあります。これは、鰹を蒸して、焙って、保存が利くように加工したもので、江戸時代の江戸っ子のわがままに合わせて作られたといわれているのです。

江戸っ子の粋と「目には青葉 山ほととぎす 初鰹」という句、そして江戸っ子がいかに「粋」を大事にし、そして毎日を楽しんだのか。そんなことが、この季節には思い起こされるのではないのでしょうか。江戸っ子の元気な姿と、初夏の力があふれる雰囲気がちょうどマッチして、風流も感じさせる。そんな季節なのです。